あなたを愛したいくつかの理由

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あなたを愛したいくつかの理由

【Ｎコード】
Ｎ２６２８Ｘ

【作者名】
河野　る宇

【あらすじ】
＊別れと出会い。哀しみと喜び――それらは人を強くする。
どちらかだけでは不十分なのだ……
※小説サイト「野いちご」にも投稿させていただいている作品です。

＊フォシエント皇国

「父さん！　早く！」
「気をつけろよソフィア」
イタリアを思わせる街並み――ヨーロッパの中程にある小国『フォシエント皇国』
１００年ほど前にはイタリアの占領下にあったため、それまではイタリア語が常用語だった。
しかし１００年前にフォシエントは独立し、イタリアに占領されるまで統治していた皇族の子孫たちが再びこの国を治める事となった。
資本主義国家だが、統治するのは皇族という珍しい国でもある。
隣国には『ルシエッティ王国』があり、長らくその国とは対立関係にあった。ルシエッティ王国はイギリスの支配下にあった事もあり、街並みはイギリスを思わせる。
こちらも１００年前に独立し王族が治める統治国家だ。
フォシエントは独立を機に、国の言葉をイタリア語から英語に切り替えた。少々、荒い言葉遣いでオーストラリア英語に近い。
少女と男がフォシエントの首都、皇族が住む城のある街カーサレティアを歩いていた。

＊ありふれた日常

「置いてっちゃうよー！」
今日はハイスクールの合格祝いに、父さんとちょっと高いレストランで食事をするんだ。
お母さんを13歳の時に亡くしてから、あたしは父さんと2人で暮らしている。金の髪は母さん、緑の目は父さん譲り。
この国の人たちは人種がバラバラだからあたしの容姿はさして珍しくない。皇族の人は黒髪が多いらしいけど。
大きな背中の父さんは、似合わないスーツを着て苦笑いを浮かべてどっしりと歩いてくる。
189？の身長に威圧感を持つ人もいるけど、本当はすっごく優しいんだから。
フォーマルな恰好したのには訳がある。だって、フランス料理店なんだもの。あたしはお気に入りの淡い緑のワンピースと、上品なスパンコールで飾られたハンドバッグを持って父さんが歩いてくるのを待った。
「遅いよ～」
背中までの緩やかなカールを描く髪が父の歩みを急かすように風に揺れる。

そして店に到着し、慣れないフランス料理に父はギクシャク気味に料理を口に運ぶ。
「フフッ」
あたしはそれが可笑しくて、必死で笑いをこらえた。
あたしも緊張してあんまり味は覚えてないけど……

それから、夜の街をあたしと父さんはぶらぶらと歩いた。
マニアの観光客が来る程度の小国だけど、あたしはこの国が好き。

「父さん！」
ソフィアは父の腕に自分の腕を絡めて、ニッコリと見上げる。男はそんなソフィアに柔らかな笑みを浮かべ、その頭を優しくなでた。
「えへへ……」
大きい父さんの手。ごつごつしてるけど、あたしはこの手が好き。

それから数日後――
「！」
朝起きて、目をこすりながらキッチンに向かうと父が誰かと携帯電話で話していた。
その瞳は仕事の時の目……
「！　おはよう」
電話を切って、心配そうに見つめるソフィアに気が付く。
「おはよう……お仕事？」
「ああ。今回はそんなに大きな仕事じゃないよ」
言いながらソフィアの頭をなでる。
「うん……」
この時の手は嫌いだった。父さんの仕事の時の手……父さんはフリーの傭兵だから。

次の日――
「それじゃあ行ってくるよ。ちゃんと留守番してるんだぞ」
「うん」
父さんは明るく仕事に出かけた。無事に帰ってくる事をあたしは必死に祈った。
母さんは父さんの仕事に誇りを持っていた。兵士でなければ人を救えない場所があるから。
解ってる。けど……やっぱり怖い。あたしは、父さんがいなくなったら1人になってしまう。
「……独りは嫌だよ」

ソフィアは玄関のドアにぽつりとつぶやいた。
ハイスクールで新しい友達が出来て、父さんの帰りを待つ日々。今回のお仕事はトータル2週間くらいだって言っていたけど、早く帰って来て欲しい。
母さんが死んでから、父さんがいないあいだあたしは1人で生活しなきゃならないから料理は自然と上手くなった。
サバイバル料理なら父さんは得意なんだけど、そんなのばっかり食べてられない。

「……はぁ」
もうすぐ2週間経つ、ソフィアは溜息混じりに夕飯の準備を始めた。
「！」
玄関の方から何か音がして少女は警戒しながら玄関に向かう。
「！　父さん！」
開かれたドアに見えた影に飛びついた。
「ははは、ただいま」

そんな心配を繰り返しつつ、少女は18歳となりハイスクール卒業を迎えた。
これからは仕事をして、父さんにはなるべく仕事をやらないでもらうようにしなきゃ！　父さんが仕事をするのは私のためだけじゃない事は解っているけど、やっぱり怖い。
そんな事を考えている間でも、父さんの携帯には要請がかかってくる。
「……」
仕事に出かける父に心配そうな瞳を浮かべる。
「大丈夫。おまえに一つ、いい事を教えてやろう」
目を細めて、彼女を安心させるように発した。
「何……？」

「俺たち傭兵の中にな、素晴らしい奴がいるんだ」
「！　へえ……」
「ベリルって言うんだが、こいつの戦闘センスはずば抜けてる。しかも、イイ男だ」
「！　何それ」
ソフィアは苦笑いで呆れた声を上げる。そんな彼女の頭を撫でて、男はいつものように出かけた。

＊還る場所

それから1週間が過ぎ、ソフィアが夕飯の準備をしていると電話が鳴った。
「はい」
受話器の向こうから知らない男の人の声――父さんの友達だと言ったあと、声を低くして続けた。
「！？」
男の言葉に声を無くす。
「父さんが……？」
そのまま床にへたり込んだ。涙が溢れて止まらない。
『父が戦死した』――ずっと聞きたくなかった言葉が、彼女の胸に突き刺さった。
「父さんのバカ……」
大丈夫だって言ったじゃない……嘘つき……！
＜それで、君の父さんの遺骨はベリルって奴が持っていくから……おい、聞いてるのか？＞
ソフィアの耳には、その言葉はもはや届かなかった。

それからおよそ3日が経ち、何もする気力が無く呆然と日々を過ごしていた。
「お仕事見つけなくちゃ……」
か細く発するが、まだそれが出来る気分じゃない。
「！」
ふいに玄関の呼び鈴が鳴ってフラフラと無意識に玄関に向かった。
「……はい」
「失礼。ソフィア・ジェラルド？」
「！？」
入ってきた青年に一瞬、心臓が高鳴る――金色のショートヘアに

エメラルド色の瞳。２５歳ほどと見受けられる。
「はい……そうですけど」
ソフトジーンズに黒いインナースーツ、その上に淡い水色の長袖前開きのシャツを合わせた格好の青年の右肩に、大きなバッグが提げられていた。
彼女の名前を確認すると少し目を伏せて発する。
「カークの遺骨を届けに来た」
「え……」
耳を疑うように呆然としている彼女を静かに見つめて、青年は怪訝な表情を浮かべた。
「？　連絡は来ていないのか」
「初めて知りました……」
「……そうか」
「それ……父の？」
ベリルと名乗った青年の肩に提げられているバッグに目を向ける。
「すまない」
「え？」
ぼそりと発した青年を見上げ首をかしげた。
「私の責任だ」
「どういう意味ですか」
「私が指揮を執っていた」
「！？」
彼女は目を見開いたあと、強く拳を握りしめギロリと睨み付けた。
「なんであなたみたいな人が！？」
どう考えたって父さんの方が経験もあって落ち着いてるのに、なんでこんな人が指揮を執るのよ！
「あなた、名前は？」
「ベリルだ」
「！？」
父さんが言ってた素晴らしい傭兵ってこの人のコトなの！？

「全然……素晴らしくなんか無いじゃない」
憎しみを帯びた瞳でつぶやいた彼女に、彼はただ静かにそこに立っているだけだった。言い訳も目を逸らす事もなく、じっと彼女の怒りと憎しみを受け止め続ける。
「……」
沈黙している彼女にバッグから遺骨の入ったシルクの白い布にくるまれた30?ほどの木箱を差し出す。
「！」
潤んだ瞳でそれを受け取り腕の中のそれをじっと見下ろした。現実を否応なく突きつけられ、どうしていいのか少しだけ戸惑う。
「父さん……」
あんなに大きかった父さんがこんなに小さくなっちゃった……檜（ひのき）の香りがソフィアの気持ちを落ち着かせる。
死んでも父さんはあたしを落ち着かせてくれるのね……小さく笑った。
「ごめんなさい」
「いや」
じっと待ってくれているベリルに気付いて涙を乱暴に拭い彼を家の中に促した。
リビングに案内し、遺骨をリビングテーブルの上に乗せキッチンに向かう。
「構わなくて良い」
「……はい」
そう言われても、やっぱりお客さんには何か出さないと……と生返事を返して冷蔵庫からジュースを取り出す。
グラスに注いだジュースを彼の前に置き、向かいの2人掛けソファに腰を落とした。
「本当にごめんなさい……」
すまなそうな表情を浮かべ、伏し目がちに発した彼女にゆっくりと頭を横に振る。

「謝る必要はない」
「父さん……最期はどうでしたか」
「カークは勇敢だった」
よく通る声がリビングに響く。父さんの最期を、その声はしっかりと伝えるように発した。
今回の要請は、中東で起きている内戦で取り残された村の住民を救い出す仕事だった。周り中が敵という中でベリルさんたちは住民たちを避難させていた。
「子どもが1人、離れた場所にいてカークはその子を助けるために上に覆い被さった」
「!?」
仲間の応戦は間に合わず、父さんは銃弾を何発も浴びたらしい。
「それで……その子どもは……」
「助かったよ」
彼の言葉にホッとして、再び流れた涙を手の甲で拭った。
「父さんは、その子を救ったのね」
彼女の言葉に無言で頷く。
「父さんは……あたしの誇りです」
「素晴らしい傭兵だった」
ベリルさんの言葉が、あたしは嬉しかった……胸を張って誇れる父なのだと、誰にも気兼ねなく言える事なのだと確信した。
「!」
彼が立ち上がると途端に不安が胸を締め付ける。
「……」
入り口の方を一瞥して、ソフィアに視線を移す。
「仕事は決まっているのか」
「あ……まだ卒業したばかりで」
「ふむ……」
少し考えたあと口を開いた。
「もし希望があるのなら私が紹介してもよいが」

「！」

お仕事、紹介してくれるの？　それは有り難いけど……特に決めて無かったから、いきなり訊かれても解らない。

＊おかえりなさい

「自分で探せるのなら構わんよ」
嫌味のない笑顔で発して玄関に向かった。
「！」
帰っちゃうの？　もう少しいてほしいけど……そんなコト言えない。
「あの……父の納骨には……」
「参列を許されるのなら」
「是非、来て下さい」
「詳細はまた連絡してくれ」
上品な物腰で、傭兵と言われないと絶対に解らないその人は優しい微笑みを残して去っていった。
「……」
ソフィアは1人、ポツンとリビングテーブルに乗せられている木箱を見つめる。
溜息を漏らしフタを開いたその中には、白い陶器で出来た骨壺が納められていた。
「父さん……」
ここまで遺体を運ぶのは困難だったため、遺骨として父は冷たい陶器に入れられ還ってきた。ひんやりとする小さな壺を愛おしくなでたあと、隣に置かれているいくつかの物品に視線を移す。
「……」
遺骨と共に渡された父さんの遺品は携帯電話と小さな楕円形のプレート……兵士たちが首に下げるているやつだ。無事に死体だけでも還れるようにと、みんな下げているらしい。
軽い金属音は、元々の素材が汚れている事を物語っていた。
「父さん」
小さくつぶやいてプレートを両手でそっと包んだ。

「おかえり」

＊長い日々

本来は葬儀の後に遺体を燃して数日後に納骨だけど、もう骨になっちゃったから納骨だけで済ませるコトにした。
正直に言えば思っていたほどショックは無い。覚悟はしていたもの……ただ、寂しいのは独りきりの食事だ。
今までなら帰ってきてくれる人がいたから楽しく食べられた。
でも、もうそんな人はいない……あたしには恋人もいないから抱きしめてくれるような人すらいない。

納骨は親しい人たちだけで2日後に行う事になった。
1日がとても無駄に長く感じられる。納骨の手続きや準備が無かったら、考える時間ばかりが出来て泣いてばかりだったかもしれない。
「！」
ふいに玄関の呼び鈴が鳴った。
「はい。……！　メアリーおばさん」
「大変だったわね」
右隣のメアリーおばさんが、そう言って抱きしめてくれた。
メアリーおばさんは5年くらい前にご主人を亡くして独り暮らしをしている。品の良い口元に、年相応のルージュが引かれていた。
肩まで伸ばされた白髪交じりの銀髪があたしの哀しみに同情するようにしっとりしていた。
「納骨の準備？」
「はい」
彼女をリビングに促してコーヒーを煎れる。
思っていたよりも元気そうな彼女に老齢の女性は返って心配になったようだ。不安げな瞳がコーヒーを持ってきた彼女に向けられる。
「大丈夫？」

「はい。お金も父さんの貯金があるし」
そんな話をしたんじゃないコトは解ってた。でも、あたしは話をすり替える。酷く心配してほしくなかったから……だから元気であるコトを見せるの。落ち込んでたってどうにかなる訳じゃないし。

しばらく会話を交わしてメアリーを玄関で見送る。
「何か困ったことがあったらいつでも言ってね」
「ありがとうございます」
心配そうに何度か振り返るメアリーおばさんに笑顔を返し、家の中に入る。
「……はぁ」
ドアにもたれかかり溜息を吐き出した。

それから納骨の手続きを終えて当日まで父さんの荷物の整理を始めた。
「……少ないね」
必要最低限の物しかなくて目を細めて苦笑い。父さんの趣味はチェス。あんな大きな体でチェス盤を前によく唸ってたっけ。
どうしても勝てない人がいて、「いつか鼻をあかしてやるんだ」って言ってたっけな……その人には勝てたんだろうか。
ううん、きっとまだ勝ってないのよね。だって、勝っていたら大喜びしたハズだもの。
少しだけ残して、売れる物は売ろうと思っていたけどチェス盤は残しておこう。
「！」
ふとナイトテーブルの上に乗せられているフォトスタンドが視界に入る。
「……」
見ないようにしていたのに……と少し眉をひそめた。
それは、父のカークとソフィアが笑顔で映っている写真、その隣

には母親のセレンと3人で映っている写真が並んでいる。
「……」
その2つを無言でパタリと伏せた。
そんな日々の間にも幾人かが彼女の様子を見に訪れる。皆それぞれに彼女の元気な姿に心を痛めているのだろう。
あたしは大丈夫なのに、みんな心配し過ぎなんだよ……小さく笑う。
「あ、連絡しなくちゃ」
父親の携帯から見つけていたベリルの番号に自分の携帯からかけた。
<――はい>
「あ、ベリルさん？」
<！　ソフィアか>
少し驚いた声が返ってきた。そうか、あたしの番号は登録されてないもんね。
「あの、納骨の日なんですけど……」
日時を報告して電話を切った。ベリルさんは他の人のように慰めの言葉は言わなかった。
自分が父さんを死なせてしまった重みからだろうか？　ううん、そんな安っぽい感情なんかじゃないよね。
傭兵は仲間の死を沢山見てきているんだもの。それに、ベリルさんのせいじゃないコトはよく解ってる。
言い方は悪いかもしれないけれど……父さんの死は『必然的な死』だったのかもしれない。
そう思うコトは、あたしの胸を締め付けるけど……頭の中ではそれが自然なんだと思えた。
納骨の日――白い建物に２０人ほどが集まった。壁一面に小さな扉がある。納骨堂だ。

神父さまが聖書の言葉を引用して語り始める。静かな堂内に響く声は神聖な空間を作り出す。
「あれが指揮官だったらしい」
「！」
ソフィアの耳に小さな声が届いた。父の友人だった2人だ。ベリルの方をチラチラ見ながら話している。
当の彼は後ろの端の方でじっと静かに神父の言葉を聞いていた。
「あんな若造に動かされてカークも可哀想に」
「！」
なんですって！？　それベリルさんに聞こえてるわよ。というか、聞こえるように言ってるのがバレバレだわ。
「……っ」
何か言おうとして振り返った彼女と目が合ったベリルは、無言で頭を小さく横に振った。
「！」
何も言うなって？　あんなコト言われて平気なの？
黒いスーツじゃないけど、暗めの服を着ているベリルさんはただじっと彼らの言葉を浴びていた。
数分後に神父の言葉が終わり、下から5番目の扉に父の遺骨を納める。それで葬儀は終り。一同はホッとしたように口を開き始めた。
「へっよく面(ツラ)を出せたもんだ」
「まったくだな」
沢山の扉の前に置かれている大きなテーブルに近づいて白い花を一輪乗せた彼の背中にあの2人が再び鋭い言葉を浴びせる。
「……っ」
あの人たち、まだそんなコト！
「！　ソフィア……」
怒った顔で2人に近づく彼女をベリルは制止するように名を呼んだが、このままでは彼女の気が収まらなかった。

「！」
怒った顔をして見上げるソフィアに、老齢の男性2人は少し驚く。
「そんなコト言わないで。ベリルさんは父さんが凄い人だって言ってた人なんです。そんな風に言ったら……ベリルさんを褒めた父さんまでバカにされてるみたいで、嫌です」
「！？」
2人の男性はその言葉にハッとした。そして、すまなそうに頭をかいて謝罪する。
「すまなかったよ」
「そうだな。カークは立派に仕事を成し遂げたんだ」
「ありがとう」
解ってくれた2人に潤んだ瞳でニコリと微笑む。

「！」
去っていく2人を見つめている彼女の隣にベリルが無言で立つ。
「ごめんなさい。辛かったでしょ」
「いや」
彼はさして関心も無いような表情を入り口に向けていた。
「言って楽になる事もある」
「！？」
彼女はその言葉に驚き、すぐに理解した。
ベリルさんはもしかして『哀しみのはけ口』になるために来たんじゃ……あえて言葉の剣（つるぎ）を浴びに来たの？　あたしたちのために？
「どうしてそこまで……」
驚きと戸惑いの眼差しで見上げる彼女を一瞥し、彼はつぶやくように発する。
「負った責任から逃れる事は出来ない」
「……」
父さんが、彼を信頼していた理由が解った気がした。

＊決意

それからソフィアはベリルを家に招待した。彼は少しためらったが、父の事が聞きたいと言うと承諾した。
彼女は自分の知らない戦場での父の話が聞きたかったのだ。リビングに促し、紅茶を煎れにキッチンへ向かう。
「！」
ティカップをトレイに乗せて戻ってきた彼女の目に、スラリとした足を組んで待っているベリルの姿が映る。
一瞬、見とれてしまった。落ち着いた雰囲気と、そこはかとなくかもし出される上品な動き……目が自然と彼を追う。

「カークはああ見えて緻密（ちみつ）な計画を好んでいた」
カップを傾けながら語った言葉に彼女は笑みを浮かべた。
「父さんって見た目がああだから、凄く無骨に見えるみたいね」
嬉しそうに語る彼女を見やり、ベリルはおもむろに何かを目の前のテーブルに乗せた。
「！　これ……」
「渡すのを忘れていた」
テーブルに置かれた薄汚れた携帯用のチェス盤を手に取る。
「父さんの……？」
「決行の前に私に預かってくれと」
その言葉にか細く応える。
「そうだったんだ……父さんが勝てないって言ってたの、ベリルさんだったのね」
「！　カークがそんな事を？」
「『いつか絶対に勝つ！』……って」
「そうか」
目を細めてチェス盤を見つめる。

「！　……？」
再び差し出されたチェス盤に怪訝な表情を浮かべた。
「ベリルさんが持っていてください。あたしには家のチェス盤があるから。これは、戦友だったあなたに持っていて欲しいです」
小さく頷きチェス盤を受け取って確認するように手を滑らせる。
そして、２つに折られた盤を開き中の駒を出して並べていった。
「これはね」
並べながら発する。
「クイーンが無いのだよ」
「！？」
全て並べられたチェスの駒のキングと対をなすハズの、そこにあるべきクイーンが無くぽっかりと空いていた。
「無くしたの？」
「奴がね」
懐かしむように駒を動かしながら彼は付け加える。
「私がクイーン側を使っていた」
「！」
クイーンを動かす事もないってコト？　父さんは、そんな相手とチェスをしていたの？
「奴は私がいつかクイーンを動かす事になった時どうするのかを知りたかったようだ」
「もし動かすコトになったら……どうしていましたか？」
「……」
彼は少し黙ったあと、パンツのバックポケットから何かを取り出してクイーンの位置に立てた。
「！」
それはオレンジ色の石で出来たクイーン――サンストーンと呼ばれる石だ。
インクルージョン（鉱物などに入っている液体や小さな結晶などの総称）の効果でキラキラと乱反射している。

ムーンストーンと同じフェルドスパーという鉱物の仲間であるため、その色とムーンストーンと対を成す意味でサンストーンと名付けられた。
「私のクイーンを動かした者への賞品だ」
太陽のエネルギーを宿しているとされ、生きる希望と幸福を与えてくれる。そして、才能を引き出す力があると云われる石だ。
そして彼はクイーンの位置から、テーブルの上に移動させチェス盤を仕舞い始める。
「私からお前に」
「！　あたしに？」
「奴の代わりに受け取ってもらいたい」
「でも……父さんはクイーンを動かせなかったんでしょ？」
「続けていればいつかは動かしただろう。あと一歩だった」
「それホント？」
苦笑いで発した彼女に少し笑って肩をすくませる。その動作でウソなんだなって解った。きっと父さんは彼には歯が立たなかったんだ。
「ありがとう」
サンストーンのクイーンを静かに持ち上げた。
「！」
彼が立ち上がると途端に不安に襲われ、孤独感が心を満たしていった。そして、もう彼とは会えない気がして胸が締め付けられる。
玄関に向かうその背中に手を伸ばしたい衝動にかられた。
「私に出来る事があればいつでも連絡してくるといい」
そう言ってドアに手をかける。
「待って！」
「ん？」
その声に振り向いて、うつむいている彼女の次の言葉を待つ。
「希望の仕事……あります」
「！　なんだね？」

「傭兵に……」
「何？」
「あなたの弟子にしてください！」
彼女が意を決し顔を上げて応えると彼は目を丸くした。
「……本気で言っているのか」
「！」
とても怖い目になった。あたしは冗談で言ったんじゃない。これでも少しは父さんから傭兵については色々と聞いて学んでいるんだ。
「……」
彼はソフィアの目をジッと見つめたあと小さく溜息を吐き出し、呆れたように首を振った。
「2週間後にまた来る」
「あたしの決意は変わりません！」
閉じられていくドアに向かって声を張り上げた。

「そうよ。本気なんだから。2週間もいらないわ」
リビングをグルグルと歩き回り、ぶつぶつと繰り返す。
「！」
そしてキッチンの方に目を向けた。
「ベリルさんの弟子になるなら、電化製品とか処分しなくちゃ」
さっそくノートパソコンを開いてリサイクル業者を検索し始めた。

「！」
次の日――ソフィアの家から運ばれていく冷蔵庫やエアコンに隣のメアリーが驚いて家の中をのぞき込む。
「あ、おばさん」
「どうしたの？」
「ちょっと留守にするので、電化製品は売っちゃおうかと」
「！　どこかに行くの？」
メアリーおばさんはストールを羽織り直しながら不安げに訊ねる。

「少しの間だけ、遠くに」
さすがに「傭兵の弟子になりに」とは言えなくて言葉を濁した。
「そう……でも帰ってくるんでしょ？」
「はい。必ず」
あたしがそう言うと、メアリーおばさんはニコリと笑った。
「いつ発つの？」
「多分、2週間後」
「……多分？」
「まだハッキリとしてないの」
肩をすくめて困ったように苦笑いを浮かべた。
リサイクル業者からお金を受け取り、走り去っていくトラックの後ろ姿を見つめる。
「本当に大丈夫……？」
心配そうにあたしの瞳をのぞき込むメアリーおばさん。
「大丈夫だって！　今からワクワクしてるんだから」
あたしはウインクしてみせた。だって本当の事なんだもの。彼とずっと一緒にいられるんだ。あたしはそう思っていた。
彼が本当は何者なのか……あたしは何も知らないで子どものように彼を慕っていた――

＊残像

「ふう」
さっぱりした部屋を見回し、溜息混じりに笑う。
「こんなに広かったんだな～」
キッチンに足を踏み入れて感心するように発した。彼女が産まれる前から人が生活していた家は、その生きた証が所々に刻まれている。
懐かしむように指で傷をなぞり全体を見回した。思い出は連れていける、だから寂しくなんかない。
「さて……ベリルさんが来るまで外食ね」
電化製品を売ったお金で１週間くらいは持ちそうだ。
父さんが残してくれたお金も結構あって、実は１０年くらいは働かないでも暮らせそうだった。先のことは解らないから働くコトはしたいんだけど……傭兵の弟子にもお給料って入るのかしらね？
「あ、荷造りもしなくちゃ！」
階段を駆け上がり、スーツケースをクローゼットから引っ張り出した。そして、かけられている服を確認するように眺める。
「チャラチャラした服はダメよね」
なるべく動きやすい服を選んでベッドに投げ置いて、一通り済ませるとスーツケースに詰め始めた。

＊女たちの無言の闘い

ベリルさんが来るまで外食だと思っていたけれど、メアリーおばさんが夕食に招待してくれたりしてあたしは楽しく過ごしていた。

しばらく留守にするから、ご近所のみんなにはそれを知らせて友達とも当分は会えないコトも伝えて……携帯には友達や知り合いから励ましのメールがいくつか送られて来る。

「！」

それであたしは思い出した。ベリルさんは一度もあたしに慰めるような言葉は言わなかったコトを……それに別段なんとも思ってなかったけれどいま思えば、あれこそが彼の優しさだったのかもしれない。

周りから言われ慣れた言葉を今更、誰が聞きたいだろうか。ましてや、父を死に追いやった人間から……知らない人から紡がれる慰めの言葉を、素直に聞くコトが出来ただろうか？

あの時に言われていたら、あたしはきっと彼を「人殺し」と罵倒したかもしれない……そんなあたしを、父さんは喜ぶだろうか。悲しい瞳で見つめる父さんの姿が脳裏に浮かぶ。

2週間が経ち――

「……」

ソフィアの家のリビングでベリルは無言で立っていた。彼女の決意が、訊かなくてもその家の様子から見て取れる。

「はぁ～」

深い溜息を吐き出し、スーツケースを持っている彼女に向き直った。

「特別扱いはしない」

「解ってます」

決心の揺るがない彼女を一瞥してスーツケースを持ち玄関に向か

う。それに軽く礼を言い彼のあとに続いた。
「しばらくお別れね」
玄関のドアに鍵をかけ、ゆっくりと見上げた。目に焼き付けるようにしばらく眺めて体を反転させる。
「！」
その目にオレンジレッドのピックアップトラックが飛び込んできた。
「これ……ベリルさんの車？」
「そうだ」
ジープとか四駆とか乗ってるのかと思ってた。
後部座席にスーツケースを乗せて、彼女は助手席に乗り込む。
「！」
カーナビのある部分に目が留まった。カーナビと、そこにあるくぼみなどが気になってまじまじと見つめる。
「……？」
初めて見る形の機械だ……
「いつか使い方を知る時が来る」
ベリルはクスッと笑った。
そうしてシートベルトを締めると車はゆっくり走り出す。家が視界に入っているあいだ、速度はそのままにゆるやかに遠ざかっていった。
こんな小さな心遣いまでしてくれる彼に、あたしはますます惹かれていった。

「それで、どこに行くんですか？」
制限速度を守りながら街中を走る車の中で行き先を訊ねる。
「ダーウィン」
「ダーウィンて、えーと……。！　オーストラリア！？」
フォシエント皇国からのオーストラリアへの直行便は無い。２つほどの経由でオーストラリアに向かわなければならない。

彼女にとっては初めての長距離移動だ。
見慣れた風景ともしばらくお別れなのだと、流れる町並みを食い入るように見つめる。あのお店のアクセサリーが好きだとか、あそこのカフェで友達とよくお話していたな……など目が潤む。
時間は止まってくれない。そう考えると残酷ではあるけれど、未来の景色は自分では計り知れない。

空港に到着して手続きを済ませる。
飛行機に乗った事くらいはある彼女は、手続きが違う事に気がつく。彼がパスポートを見せるとＶＩＰルームに通されて、ほぼボディチェックも無く搭乗時刻まで凄い待遇を受けた。
「……」
彼女は乗り慣れないシートで緊張が隠せない。
「べ、ベリルさん……あのっ」
「ベリルでいい」
「こ、これって……ファーストクラスですよね」
「金は使うためにある」
ゆったりした卵形のシートは、空の上にあっても快適な空間を作り出しキャビンアテンダントはこの上もなく丁寧だ。
初めて乗る上質のシートに仰天したソフィアだが、それよりも驚いたのはベリルへの対応だった。
彼の横顔を見つめて呆れたように小さく溜息を吐き出した。ボディチェックを受けていない彼は、驚くほどの武装をしている。
それを知っているうえでのチェック無しなのだ。呆れるしかない。
「……」
どうでもいいけど、あのキャビンアテンダント。妙にベリルさんに馴れ馴れしいわね……彼女は1人の女性に睨みを利かせた。
大人の女性の余裕なのだろうか、そのキャビンアテンダントは鼻を鳴らすような表情を浮かべた。
そんな女の静かな闘いなど知ってか知らずか、彼は常備されてい

る雑誌に目を通している。さして興味の無いファッション系の雑誌なのだが他にも客がいる手前、さすがに武器を出して手入れをする訳にもいかずに仕方なくめくっているという処だ。
そんな、つまらなさそうな表情の彼にもキャビンアテンダントたちは心トキめかせていた。
「……？」
しかし、彼女はさすがに冷静だった。ここまで周りに無関心な彼に怪訝な表情を浮かべる。自分の容姿に自覚が無い訳でもないのはなんとなく解るけれど、とにかく自分についてはまるで興味が無いのだろう。
そういう人も珍しいな……と思いつつ、彼女とキャビンアテンダントとの無言の戦いはフライトが終わるまで続いた。

そうして長い空の旅も終わり、ダーウィン国際空港に降り立つ。
「ん～……」
伸びをしてオーストラリアの空気を肺一杯に吸い込んだ。
一緒に運んできたオレンジレッドのピックアップトラックの助手席に乗り込むと、車はダーウィンにあるベリルの家に向かった。
「ベリルさ……ベリルは恋人いないんですか？」
「ん？　いないね」
「そうなんですか」
なんとなく今更な質問をしている気がしないでもないけど……
「！　日差しきついんですね」
「目は守るようにしておくといい」
そう言ってサングラスを渡してくれた。
「ありがとう」
そういえば、オーストラリアは日差しがきついから子どもは帽子が義務づけられてるとか聞いた事がある。
ベリルさんがサングラスを持っている理由は、日差し対策だけじゃなさそうだけど。

「！」
何かに気づいたような仕草をした彼はパンツのバックポケットから携帯を取り出した。いつもマナーモードにしてるんだ、などと考えつつ彼の次の動作にまた驚く。
「！」
カーナビの凹みに携帯を開いて差し込んだ。
「どうした」
＜いま移動中か？＞
車内に響く男の声に回りを見回す。
「え？　え？」
こんな機械、初めて見た。
＜あれ、女連れか＞
「心配ない」
＜依頼なんだけど。鬼ごっこの＞
「！　詳細はメールに頼む」
＜ＯＫ＞
切られた携帯電話と機械をマジマジと眺める彼女にクスッと笑った。
「こういう使い方だ」
携帯を凹みから外してポケットに仕舞う。
「凄い……あたしのでも出来る？」
肩をすくめ、目で無理だと示した。
「カークのものなら可能だがね」
「！　父さんの？」
そういえば、父さんの携帯はなんか他の人と少し違ってた気がする。
傭兵たちの中には、そういう特殊な機械を使う人もいるとベリルさんが教えてくれた。

＊女としてちょっと凹みます

ダーウィンの中心から少し離れた静かな住宅地――他の家と変わらない一軒家の前に車は止まる。ガレージのシャッターが自動で開き、吸い込まれるように静かに入った。

ガレージの後ろにある別の扉から出て、玄関に足を向ける。

キーを出すのかと思ったら、ドアの取っ手を掴んで数秒後、カチリ……という音が微かにしてドアが開いた。

「？」

どういうシステムなのこれ？　首をかしげてドアの取っ手をマジマジとのぞき込む彼女に小さく笑って応える。

「指紋認証だよ」

これも世間には出回っていない新しいシステムらしく、いちいち別の画面に手を当てる必要が無くて便利そうだ。

「ああ、買い物に行かねばな」

思い出したように発した。

「え？」

「腹が減ったろう」

近くにマーケットがあるらしくて、２人は買い出しに出かけた。

歩いて１０分くらいの処に、ブラウンの煉瓦造りの建物が大きな駐車場を眼下にそびえている。

その駐車場に負けないくらい大きなスーパーマーケットが建っていた。自動ドアをくぐり、彼はカートを手にする。

どんな姿も様になるなぁ……と、手際よく食材をカートに入れていくその姿を彼女はじっと眺めた。

「食べたいものはあるか」

「えっ！？　い、いいえ特には……」

そこでハタと気がつく。

そういえばカートに入れてるのって全部、食材よね。というコト

は……自分で作るってこと？
　もしかして、あたしに期待してたらどうしよう！？　作れないワケじゃないけど、料理が得意ってほどでもないよ！
「どうした」
「！　う、ううん。なんでもない！」
　ひと通りの食材を買い終えて帰路に着く。彼は持ってきていたバッグに食材を詰めて、たすきがけにしていた。
　何かある時のために両手は常に開けておくんだとか。それを聞いた彼女は「なるほど」と感心した。
　店から出て信号待ちのあいだ、その横顔を見つめる。
　小さな風にもなびく金色のショートヘア、上品だけどエラそうには見えない振る舞いと輝くエメラルドの瞳――いつまでも見つめていたい衝動にかられる。

　家に戻り食材を冷蔵庫などに仕舞っていく。
　綺麗に整頓されたキッチンと、そこからつながっているリビングルーム。４０インチのＬＥＤテレビが、品の良いソファとリビングテーブルの前に置かれていた。
　カウンターキッチンの前にはキッチンテーブル、彼女はダイニングキッチンとリビングを交互に見やる。
「！　あ、それ……」
「ん？」
　冷蔵庫から取り出した食材に反応して応える。
「パエリア……父が得意だった」
　並べられている魚介類を見つめて懐かしい声を上げた。
「！　ほう」
　彼女の言葉に目を細めて殻の付いたホタテを手に取る。
「なるほど」
　彼は小さくつぶやいて微笑んだ。
　あたしはこのとき初めて知った。いつも「美味しい！」と言って

食べていた父さん自慢のパエリアは、ベリルさん直伝の料理だったコトに……
「父は、本当にあなたのコトが好きだったんですね」
「私を息子のように思ってくれていたよ」
「じゃあ父は子どもから料理を教わったの？」
それを聞いた彼が「！　そうなるのか」と小さく笑みをこぼした。

「……」
手際よく調理していく様子を呆然と見つめて、良かった名乗り出なくて。どう考えてもあたしの方がヘタだわ……と胸をなで下ろす。
無駄のない動きに見とれているあいだにパエリアは完成した。正確に言えばパエリアが完成する間に別の料理も作っていたのだが。
パエリアと買ってきたバケット、コーンスープにグリーンサラダがテーブルの上に置かれ食事が始まった。
予想通り、彼の食べ方る姿は上品だった。傭兵というのが未だに信じられない。
「……」
パエリアに父さんを思い出す。ああ、そうだ。この味父さんの味だ……嬉しくて口元がゆるむ。
きっと父さんはこれを覚えるのに大変だったんだろうな、だってパエリアだけは美味しかったんだもの。

食事が終わり、リビングでテレビを観ている彼女の前に出されたものは……
「！」
料理の合間に作っていたマロンムースだ。
「ありがとう」
ニコリと微笑みで応え、彼はブランデーを手にソファに腰を落とす。
「……」

料理だけじゃなくて甘いモノまで作れるなんて反則だわ……ムースを口に運びながらテレビを視界に捉えて薄笑いを浮かべた。
ムースと一緒に運ばれた紅茶を傾けていた彼女に、琥珀色の液体をひと口味わい問いかける。
「傭兵に関する事は教わっているか」
「あ、うん。格闘術も少し」
そうだった、あたしは彼の弟子になりたいって言ってここにいるんだ。

しばらくして、彼女を廊下の突き当たりに促した。
「ちょっとコツが必要でね」
言って、突き当たりの床に左足のかかとをコン！　とぶつける。
「あ！？」
シャッ！　という音と共に床の一部がスライドして現れたのは、下に続く階段。
「……」
恐る恐るソ～……っとのぞき込んだ。
「騒音対策だ」
笑みを浮かべて降りていくその後に続いて降りていくと、広い空間が彼女を迎えた。
敷地一杯を使って地下の空間が作られている。トレーニングマシンや道場、防音ガラスの試射室まで完備されていた。
「格闘術は何を学んでいた」
「マーシャル・アーツです」
それを聞いて「ふむ……」と思案しながらどこかに向かった。
「？」
しばらく待っていると、戻ってきた手に持っている布を手渡される。
「着替えは向こうで」
「はい」

どうやらそれはトレーニング用の服らしい。

＊夢見る乙女

「！」

着替えを済ませて戻ってきたソフィアの目に、すでに着替えているベリルの姿が映った。

黒いトレーニングスーツの上に半袖シャツ、裾が長めで腰にスリットが入っていた。何を着ても様になっているなと一瞬、見とれてしまった。

フローリングの床に促される。四角い線で囲まれたそこには、中心に2mほどの間隔に引かれた赤い線が2本、横並びに引かれていた。

その線を目安に2人は向かい合う。初めて父以外の人と手合わせする彼女はドキドキしていた。

「！」

向かい合う彼の目にゾクリとした。今まで見た事もない視線――これが戦う時の彼なのだろうか。

フッ……とベリルが息を吐き出したのを合図に開始される。

「！　……っう」

ベリルのハイキックを左腕で受け止め、その衝撃に腕がビリビリとしびれた。

「！？」

一気にたたみ掛けてくるのかと思ったら彼は1歩、後ろに下がった。しかし、それがクセモノだった。

＊テスト

「！？　キャッ！」

その動きに気を取られ、気がつけば目の前に迫っていた。

その鋭い眼差しと、引き裂くような手の形にソフィアは思わず声を上げて守るように両手をクロスした。

「！　……？」

なんの攻撃もしてこない……？　恐る恐る両手を下げると、目の前で自分を見つめていた。

「あの……」

「なるほど」

そう言って、今度は試射室に促す。

「構えてみろ」

「え……」

ソフィアは、置かれているハンドガンを見渡し、その１つを手にした。そして１０ｍほど向こうにあるマトに向かってハンドガンを構える。

父から構えや撃ち方は習っているとはいえ、ズシリとくるその感覚に一瞬だが戸惑いを見せた。

それを見た彼は置かれているハンドガンをおもむろに手にし、構えて引鉄（ひきがね）を引く。

「わっ！？」

発せられたその音に耳を塞いだ。

「では次」

しれっと発して試射室から別の部屋に案内した。

「……」

そんな彼の姿に尻込みする。自分の力を計っている事が解ったからだ。

次に案内されたのは武器庫――色んな武器が所狭しと並べられている。
「ナイフの使い方は」
それを唖然と見つめる彼女にコンバットナイフを差し出した。
「少しだけ……」
おずおずと手に取りナイフを見つめている彼女を横目で見やり、別のナイフを手にした。上品で流れるような動きが目の前で展開される。
数秒の動きだったが、ナイフの扱いは一流だという事がシロウトながらに解った。
「……」
彼女はぎこちないながらもナイフを動かす。
ナイフを戻し、確認したように視線を外すと部屋をあとにした。
「……」
見定められているような感覚になんとなくムッとなる。
教える相手がどれくらいの力を持っているのか解らないと教えようがないものね。これは当然のことなんだ……と言い聞かせた。
彼には、相手が男だろうと女だろうと関係ないのだと実感して、本当に『弟子』として自分を見ている事に少しの胸の痛みを覚える。
「私の事はどれくらい聞いている」
「え？」
思い出そうとするように視線を少し上に向けた。
「素晴らしい傭兵だって。戦闘センスがずば抜けてて、イイ男だって」
「！」
それを聞き少し笑って眉をひそめた。
「それで終わりか」
「うん」
「ふむ……」
思案するように目を伏せた。

その日はそれで終おり、彼女は部屋を1つあてがわれた。2階が寝室で、その一番奥にある部屋が彼女の部屋になる。
階段の近くの部屋が彼の寝室。他に2つ部屋があって、仕事（傭兵）関係の服を置いている部屋と客間がある。
ベリルさんの寝室には2つベッドがあった。隣で寝たいな……なんていう願望が心に見え隠れする。
出来れば同じベッドに……とかいう高望みはいたしませんとも。
「……」
などと虚しい妄想を浮かべて、スーパーマーケットで買ったパジャマに袖を通しベッドに潜り込む。
明日は一体、何をするんだろう？　そんな事を考えながら眠りに就いた。
見た夢は最高にへんてこりんな夢だった……魔法のじゅうたんならぬ魔法のベッドに、あたしとベリルさんが乗って空を飛んでいる。
それをペガサスにまたがった父さんが追いかけていた。

「おはよーございま～す……」
変な夢のおかげで、変な目覚め方をしたあたしは間抜けな声で発する。
「おはよう」
相変わらず上品な物腰のベリルさんが爽やかに挨拶を返した。携帯電話で誰かと電話しているようだ。
いや、爽やかという言葉はなんだか妙に彼には似合わないような気がしないでもないけど……爽やかって言葉は、快活な人に似合う言葉だと思うのよね。ベリルさんは「快活な青年」っていう感じじゃないし。
うん、どっちかというと王子って感じ。麗しい人だから。
「先に着替えておいで」
電話を終えて、携帯を仕舞いながら発する。

「……？　ハッ！？」
パジャマのままだった！　言われて気がついた。
家にいた時と同じ感覚でいてしまった……慌てて部屋に戻り、急いで着替えを済ませ戻ってくる。
「！」
戻ってくると、ダイニングテーブルに朝食が並べられていた。
ベーコンエッグにバターの塗られたトーストとコンソメスープ。小さなボウルにはサラダが見栄え良く盛りつけられている。

「……」
お母さんみたい……向かいで上品に食べている彼を、スープの入ったマグカップ越しに見つめた。
「洗濯物があるなら後で出してもらいたい」
「はい。えっ！？　ダメダメ！　だめですっ」
慌てて拒否すると彼は小さく首をかしげた。
「だっ……だって……あたし、あのっ女なんですよ」
「？　それがどうした」
「……」
あたしのコト女と見てないってこと！？　ムッとしたが考えてみればそうじゃなければある意味、危険な状況だと気がついた。
同じ屋根の下で暮らすコトになる時点で考えるべき事柄じゃないの……男と女なんだから！　そんな思考をグルグルさせている彼女をよそに、彼は関心のないようにしれっと食事を進めていた。
「……」
なんか右往左往してるあたしがバカみたいじゃない。
「下着は自分で洗います……」
「そうか」

食事を終えて、彼女は下着をドラム式全自動洗濯機に放り込みその振動を見つめながらうなだれる。洗濯機があるのはキッチン裏手

の小さなスペースだ。
「どういうのかなぁ～」
両肘をつき、その手に顔を乗せてつぶやく。
「弟子にしてくださいって言ったから、それ以外では見てないってコトなのかなぁ……」
だって、そう言うしか無いじゃない。いきなり交際を求められるほど、あたしの度胸は据わってない。
「……」
ボ～っと宙を見つめる。
「どうした」
洗濯機の横でぽかんとしている彼女を見下ろした。
「ハッ！？　なんでもない！」
「ソフィア」
「はい」
「体力に自信はあるか」
「陸上部にいました」
「そうか」
それを確認してリビングに戻っていく。
「？」
なんだったのかな……

＊鬼ごっこと大人の事情

「ソフィア」
「！」
乾いた下着をバッグに詰めてリビングを通り抜けようとしたとき
ソファに腰掛けているベリルに呼び止められる。
「何ですか？」
下着、早く仕舞いたいんだけど……と、眉をひそめる彼女にＡ４
サイズほどの紙を手渡した。
「なんですかこれ？」
「頭に叩き込んでおけ」
言われて、その地図を見つめる。
「……コロンビア？」
「場所はブカラマンガ」
言いながら１枚の写真を差し出した。
「？」
そこに映っているのは、４０代半ば褐色の肌の男性。
硬い黒髪はカールしていて、彫りの深い顔立ちにブラウンの瞳は
何か暗い部分を含んでいるようにも見える。
「奴を捕らえる」
「！　依頼ですか？」
ベリルは無言で頷いた。

昼食はミックスサンドウィッチ。
「……」
凄く美味しいけど……彼女はベリルの食事にふと疑問を抱いた。
何故か彼女が食べる量よりも少ない。男の人で鍛えているから代
謝も高いはずなのだが実際、ベリルの体は筋肉質だ。裸を見た訳じ
ゃないが先日の対戦で服越しでも充分に解った。

「……」
と、あの時の彼をふと思い起こす。
まるで猫科の猛獣のようなしなやかな動き――対戦なんかしてなければ、いつまでも見ていたかった。
きっと、ライオンや豹が目の前にいたらあんな感覚なのかな……
「ああ、ここであたしは死ぬんだ」
そんな絶望感が心を支配する。
決して飼い慣らされる事の無い美しい獣――そんな獣に殺されるならいいかもしれない。そんな感情も自然と脳裏をかすめたのだった。

気を取り直して自分の部屋で色々と考える。
「とりあえず、次の仕事には連れてってくれるみたいね」
それは安心した。
「男の名前は……カイダム・レアロ。麻薬組織『ヘルドマンティス』のボス」
この男がコロンビアのブカラマンガに潜伏している。
正しくはボス“だった”男だ。組織はすでにコロンビア警察によって壊滅しているが、彼は捕まる事なく数人の仲間と共に逃げ回っているという。
その捕獲を、ブカラマンガの市長が彼に依頼してきた。
コロンビアは「地域主導の国」と言われるだけに、各地域ごとの対立が激しいとか……そう考えると、色んな「大人の事情」で彼に依頼が回ってきたんだろうな。とソフィアは考えた。
「！　そういえば、コロンビアってエメラルドの産地よね」
とにかく地形と街並みと道路と、この男の顔はしっかり覚えろって言われたけど……2日後の出発まで何を準備すればいいのかしら？　と彼女は首をかしげた。

夕刻――彼女は部屋から出てリビングに足を向ける。

「！」
するとベリルがテレビを付けてその音を聞きながらハンドガンの手入れをしていた。
微かに鼻を刺激する匂い……クリームシチューかしら？　予想しながらキッチンに行き冷蔵庫を開く。中にあったオレンジジュースの瓶を取り出しグラスに注いだ。
1杯目は一気に飲み干し2杯目を注いでリビングに戻り、彼の手元を見つめながら斜めにある1人がけソファに腰掛けた。
「……」
無言でその様子を眺める。
「覚えたか」
「！　あ、はい。少しだけ」
応えた彼女に目を向けず、手入れを終えたハンドガンを仕舞って今度はナイフを取り出した。
「！　それ、変わったナイフですね」
「スローイングナイフだよ」
投げ専用のナイフだ。格闘で使うには不向きなナイフだが、彼はこのナイフを多く装備している。
すぐに使用できて、多くを装備出来るためだ。
「あの……」
「なんだ」
ぶっきらぼうだが柔らかな物腰で聞き返す彼に訊ねた。
「何か特別な訓練とか、しなくていいんですか？」
あれから、さしたるトレーニングも無いので怪訝に感じていた。
「今はまだ様子見の期間だ。その後にどうするかを決める」
「ああ……なるほど」
「遂行後に結果を報告する」
言いながら立ち上がり、ダイニングキッチンに足を向けた。
夕飯の準備をするのだろうと思ってテレビのリモコンを持ちチャンネルを変えていく。

「ハッ！？」
しばらくテレビを見ていたが、ハッと気がついて慌ててキッチンに駆けた。
あたし何やってんのよ！　夕飯の準備、手伝わなきゃじゃない！
「……」
もう準備万端じゃないの……相変わらず無駄のない動きをしてくれますねベリルさん。

匂いの予想通り、夕飯はクリームシチューだった。絶妙な味付けにニンマリと笑みをこぼす。夕飯の後に差し出されたのはジンジャークッキーだった。
「？」
クリスマスでもないのに……？　首をかしげていると彼が小さく笑ってソファに腰を落として応える。
「クリスマスに作ってくれと頼まれてね。確認のために試作した」
「！　あ、なるほど」
ソフィアは納得して、そのクッキーを1つ手に取る。
程よい甘さと、ジンジャーの香りが鼻に通って一緒に出されたミルクティーにとても合っていた。
頼んできた傭兵仲間は、クリスマスに家族でパーティをするのだそうでジンジャークッキーを大量に注文してきた。
注文って言い方は変な気がするけど、聞いた量を考えればそう言いたくなった。

＊天使のいたずら

次の朝――

「！」

出発する準備をしていると、玄関の呼び鈴が鳴る。

「？」

ソフィアがリビング入り口の傍にあるディスプレイを覗くと、可愛い顔立ちの青年が笑顔でカメラに目線を向けて立っていた。

＜スロウンさーん、お元気ですか～？＞

「え……？」

スロウン？

「ふざけてないで入れ」

「！」

後ろから突然の声にソフィアがビクッ！　と振り返ると、彼がいつの間にかドアを開くスイッチを押していた。

「お久し振り～……っと、また女の子連れ込んでんのね」

「えっ！？」

「誤解を招く言い方はよせ」

「あっはっはっはっ！」

彼が眉をひそめると、その青年は楽しそうに声を上げて笑った。

「……？」

なんなんだろうこの人？　親しげに彼と話す青年をマジマジと見つめた。

＊衝撃の新事実

「初めまして、ダグラス・リンデンローブ・セシエル」
「あ、ソフィア・ジェラルドです」
差し出された手に素直に応える。ダグラスと名乗った青年は、輝くような笑顔を向けた。
先にベリルさんを見て無かったら、彼に惹かれていたかも……などと考える。背中までのシルヴァブロンドの髪を1つに束ね、大きめの赤茶色の瞳は年下の彼女から見ても可愛く思えた。
背はベリルさんよりも高くて、26歳だと言ってたけど……そういえばベリルさんて何歳なんだろう？　と、ふと考える。
「あの……」
「なに？」
出発の準備を続けているベリルから視線を外し、キッチンで牛乳を飲んでいる青年に問いかけた。
「ベリルさんって何歳？」
「あ～見た目は25だけど……」
微妙な言い方をした青年に怪訝な表情を浮かべた。
「そうですか」
つぶやくように発してベリルに視線を移した彼女に、青年が薄笑いを浮かべた事を知るよしもない。
「ベリルの弟子になりたいの？」
「えっ、うん」
突然、訊かれ慌てて振り返る。
「俺は6年前にベリルの弟子だったけど、手加減してくれないよ」
「！　そうなんですか？」
この人、ベリルさんの弟子だったんだ……笑顔を向ける青年を見つめた。そしてハタ……と気づく。
「……6年前？」

ちょっと待って。いま確かベリルさんは２５歳って……６年前だと１９歳ってコトになるわよ。いや、その前にこの人の方が１つ年上よね？　同じくらいの人の弟子……？　そりゃ無いコトもないだろうけど。
「５年間ベリルの弟子だったよ」
「へえ……」
……って、ちょっと待って！？　６年前に弟子で５年間？　逆算するとベリルさんは彼を弟子にした時は１４歳になるんですけど！？
「プッ……クックックックッ……」
「ダグ、からかうな」
頭の中がハテナで一杯になっている彼女を見てベリルが眉をひそめた。
「言ってなかったの？」
まだ笑いが収まらない青年は、お腹を抱えてベリルに目を向けると彼は少し視線を泳がせる。
「言うタイミング逃した？」
「？」
ダグラスはまだ意味の解らない彼女に向き直り衝撃的な言葉を投げた。
「言っても信じられないだろうけど、ベリルは不死なんだ」
「……は？」
「プッ……」
予想していた通りの反応に青年はまた吹き出した。
「ベリルは見た目２５だけど、実際は６１歳だよ」
「……はあっ！？」
驚いてベリルを見やると、彼は苦笑いを浮かべている。
「嘘じゃなくて！？」
まだ信じられないといった顔の彼女に、ダグラスは喉の奥から絞り出したような笑いをこぼす。

「この子、弟子にするの？」
「まだ決めていない」
「！」
不安げな表情を浮かべた彼女にグラスは小さく笑って声を低くする。
「情けでは弟子に出来ないからね。その辺は覚悟しといた方がいいよ」
「！　あなたに言われなくたって……」
睨みを利かせた彼女からベリルに目を移す。
「俺の荷物はもう荷台に乗せてあるから」
言って、外に親指を差すとベリルは無言で頷き、立ち上がった。
「！　あなたも行くの？」
「うん、ベリルがリーダーって聞いてね。どうせなら作戦会議がてら一緒に行こうってなったの」

そうして3人は残った食材を両隣の人に譲り車に向かう。
「！」
ソフィアは初めて家の表札に目を向けると、そこには『ベリル・レジデント』ではなく『スロウン・レイモンド』と表記されていた。
オレンジレッドのピックアップトラックがゆっくり住宅街がら離れる。
「……でさ、ちょっと調べたんだけど、さすがは第5の都市だけあって奴が身を隠す場所にしたのは正解だね」
後部座席から地図を開いてダグラスが発するとベリルは小さく溜息をついた。
「そうか」
「大体の潜伏地域は解ってるみたいだから、ブカラマンガの警察と連携をとって捕獲しないとだね」
「……」
ソフィアは2人の会話を聞きながら先日、彼から渡された地図を

見つめる。路地裏の建物まできっちり覚えろと言われたため彼女は必死だ。
記憶力には多少の自信はあるものの、出来るだけ完璧に覚えなければならない事に焦りの色は隠せない。
「街の一角を締め切ることは出来ないんだよね？」
「市長が許してはくれなかったよ」
厄介だなぁ……青年は頭をポリポリとかいた。
「んで、こっちは何人？」
「およそ２０。あとは警察に任せる」
締め切る事は拒否されたが、一定間隔で警察が立つ事は了承してくれた。
「リリパットは何人？」
「１０人」
「！　リリパット？」
聞き慣れない言葉に彼女は首をかしげる。
「リリパットってのは、俺たちの間での言葉で義賊を意味してるんだ。盗賊はナイトウォーカーって呼んでる」
ダグラスが説明し作戦会議が続けられた。
「配置は？」
「奴が潜んでいる確立の高い建物を中心に2重に囲む」
「！」
その言葉に彼女は再び顔を上げる。
捕まえる人がいそうな建物とかまでもう決めてるんだ……と、ベリルの横顔を見つめた。
「まだ大体だよ」
彼女の考えを察しダグラスが付け加える。
「現地に到着して、またいくつか修正かけるから」
「へえ……」

＊その想い

空路でいざコロンビアへ――コロンビア共和国、南アメリカ北西部に位置する共和制国家である。
北西にパナマと国境を接しており、北はカリブ海、西は太平洋に面している。首都はボゴタ。公用語はスペイン語。
国土の全てが北回帰線と南回帰線の狭間にあり基本的には熱帯性の気候だが、気候はアンデス山脈の高度によって変わる。
「……」
ソフィアはボゴタに到着し、緊張の色が隠せなかった。
誘拐と殺人の発生率で悪名高い国である。改善されたとはいえ決して油断はできない。
何故なら、農村部や地方の左翼ゲリラ、極右民兵、政府軍の戦闘、及び麻薬組織の暗躍などの事情があるためだ。

ベリルのピックアップトラックに乗り込みブカラマンガを目指す。
首都ボゴタの北東に位置するコロンビア国内第５の都市ブカラマンガ。サンタンデル県内にある。
そんな事情が無ければ、とても良い街並みなのに……ソフィアは小さく溜息を漏らす。
「ベリル！」
街の一角、あまり人通りの多くない通りに面した一つの建物に入ると沢山の人が入ってきたベリルに挨拶を交わす。
時は昼過ぎ、太陽が容赦なく街を照らしていた。
「何人だ」
「１３人。あと５人ほど来るハズだ」
訊かれた男が応える。無精髭を生やした、ミリタリー服に身を包んだ筋肉隆々の４０代ほどの男性。
「……」

そうよね、この人が傭兵なら解る気がする……と、彼女はその男を見上げて心の中で納得した。
「！　このお嬢ちゃんは？」
その男、フェテルはソフィアを見て眉を上げた。
「ベリルの弟子希望者」とダグラス。
すると、他の人たちも物珍しげに彼女に近寄る。
「！　え？　え？」
一斉に見つめられドキマギした。
「作戦会議を始めるぞ」
薄笑いで発したベリルに一同は顔を向け一斉に彼女から離れた。
「……なんなのよ」
この建物は、この街の有識者の家らしい。４階建ての３階部分を使わせて貰っている。広めの部屋に大きな丸いテーブルが真ん中に置かれていて、その上にこの街の地図を広げて皆がそれを囲んで話し合っている。
地図には、色々なマークとか線とか文字が書き記されていた。
「奴は逃げ足が速い。単独での行動は避けるように、行きすぎた追跡もだ」
ベリルが地図に手を示し動かしながら説明していく。
「リリパットの意見を聞き、的確な判断を頼む」
すると１人の女性が手を挙げた。
「これは単なる疑問なんだけど、どうして私たちリリパットだけに要請しなかったの？」
艶やかな黒髪を緩やかにカールさせ、スタイル抜群の漆黒の瞳の女性が問いかけると彼は静かな瞳で応える。
「当初はその計画だった」
「！　じゃあ何故？」
「市街地戦の予想も立てている」
その言葉に一同はどよめき立った。
「仲間も潜伏してる可能性があるってことか？」

フェテルは眉をひそめる。
「市長にはそう言ったのだがね。聞き入れてはくれなかったよ」
「そうね……確かに私たちも戦闘が可能とはいえ、市街地戦までは慣れている訳じゃないわ」
小さく唸って地図を見つめた。
「視線が通る範囲での距離を置く事は許可するが、それ以上が互いに離れる事は良しとはしない」
念を押すように指示した。
「決行はいつ？」
「今から約２時間後」
「夕暮れを狙うのか」
フェテルの言葉に頷き、軽く手を挙げる。すると、ダグラスがヘッドセットをテーブルに乗せた。
仲間たちはそれを一つずつ手に取る。
「！」
ソフィアの前にベリルからヘッドセットが差し出される。
「使い方は後で説明する」
「はい」
一通りの作戦を示し、決行１０分前まで休憩となった。
ベリルは彼女にヘッドセットの使い方を説明したあと、フェテルと２人で話し合っていた。
「……」
それをじっと遠目で見つめていたその時――
「ベリルのことが好きなの？」
「！」
ダグラスが声をかけてきた。
「……悪い？」
なんとなく彼の険のある問いかけにこちらも険で返す。
「悪いと訊かれたら悪いね」
「！　なんであなたにそんなコト……っ」

キッと睨み付けるように目を向けたあと、「は、は～ん」と鼻を鳴らした。
「まさか、彼のコト取られるとか思ってるの？　子どもね」
「違うよ」
しれっと応えた青年にカクッと肩を落とす。
「君が傷つくのも理由の一つだけど、ベリルが苦しむのも見たくないんだ」
「！」
今までの表情とはガラリと変わった雰囲気に声を詰まらせた。
「……あたしが傷つく？」
「ベリルにはね、恋愛感情は無いんだよ」
「！？」
彼の口からつむがれた言葉に愕然とした。
「恋愛感情が無い？」
「そう、根本的に欠落してる」
「そんなことっ……」
「だから」
彼女の言葉を遮って付け加える。
「だから、全ての人間を愛せるんだと思う。俺もベリルから愛情を受けた１人だからそれがよく解るんだ」
「！」
真剣な眼差しを向けて言い放つ。
「君から受ける感情をベリルは苦しく感じてる。自分にはそれを受け入れる感情が無いから」
応えられない自分にベリルは苦しむ。だから……これ以上、彼を苦しめないでほしい。
「……」
ダグラスの瞳に何も言えなくなった。
決行１０分前、ベリルの周りに全員が集まり最後の指示を受ける。

「組む相手は確認したな。報告は逐一、行うように。所定の位置に散ってくれ」
一同は一斉に建物から出て足早に遠ざかる。今回は街中という事もあり、服装はまちまちだ。ベリルもいつもの服を着ている。
「お前は私とだ」
「はい……」
少し伏し目がちに返事を返した。
「どうした」
「！　なんでもないです」
ダグラスの言葉が脳裏から離れなくて、作戦中だというのに思考がまとまらなかった。
「ソフィア！」
「！？　はっ、はいっ」
耳元で声を張り上げられ、思わずピーン！　と背筋を伸ばす。
「切り替えろ、でなければ作戦から外す」
「！　す、すいませんっ」
相手は待ってくれない。振り払うように首を大きく振ると、キリリと目をつり上げた。

＊作戦開始

周りを窺いながら、とりあえずの目標地点に向かう。
人通りは少なくない。これで逃げられたら捕まえられるのかソフィアは不安だった。
「肌で街並みの空気を読め。人の動きはそう多くは無い」
「！　はい」
逃げる者の心理は大して変わらない。その動きを読めという事か……そう理解して、人々の動きを一つ一つ確認した。
その時――
＜いたぞ！　奴は移動中だった。ベリル、そっちに向かってる！＞
「えっ！？」
「引き続き追跡を頼む」
「こっちに逃げてるんですか？」
「肌に伝わる緊張感を読め」
不安げに見つめる彼女に視線を合わせず応えた。
「！」
ベリルが何かに気づいて、すいと右を示す。
「平行に走れ」
「！　はいっ」
覇気のある返事を返し５ｍほど向こうにある道路を走った。左にある道路から時々ベリルの姿が家と家の間から覗く。

＊事実は真実

＜もうすぐ合流する！＞
＜そのまま追え＞
ベリルの冷静な声がヘッドッセットから響く。
「！」
すると、にわかに周りが騒がしくなってきた。
敵が近いってコト！？　ソフィアは体を少し強ばらせ指示通りに走る。
「！？」
目の前に突然、男が現れた。その顔は何度も覚えようと見つめた写真の男。
「止まりなさい！」
とっさに叫ぶと男は立ち止まり、ブラウンの瞳を鋭く向けてきた。
カイダム・レアロだ。
＜刺激するな＞
「……」
「なんだ貴様は……俺を捕まえに来た奴らの仲間か」
ベリルの指示を聞きながらカイダムと対峙する。
「……っ大人しくしなさいよ。もう逃げられないんだから」
ゆっくりした口調で発したが、男はさらに視線を鋭くさせた。
威嚇など大の男に通用するハズがない。緊張と強ばりが体を強ばらせ、無意識に後ずさりしてしまう。
それが引鉄（ひきがね）となり、男は口の端をつり上げて容赦なく彼女に近づいてきた。
「！？」
思わず逃げようと上半身を反転させた。
そんな彼女の瞳に飛び込んできたのは投げつけられたナイフ――
自分でも驚くほど、そのナイフはゆっくり見えた。

「刺さる！？」
そう思って強く目を閉じた。
「っ！」
肉に刃物が刺さる音がして、ビクリと体を強ばらせたが……痛みが無い。
「……？」
恐る恐る目を開くと目の前にベリルが立っていた。
「！？」
「……っ」
押さえた右腕を見るとナイフが深々と突き刺さっている。
「きゃあ！？　ベリル！」
彼は後ろのソフィアを一瞥すると、ナイフを引き抜き痛みに小さく唸った。そしてカイダムに無表情な目を向けると男は引き気味に声を上げる。
「ヒッ……『死なない死人』か」
ベリルの瞳に男は膝をガクガクと震わせて、もはや逃げる事は叶いそうもない。
それからすぐに仲間が集まり、フェテルがカイダムの両手を後ろ手に手錠をかけた。数分後に駆けつけた警察に引き渡す。
「撤収だ」
ベリルの言葉に、みんなは集まっていた建物に足を向けた。
「痛くない？」
「心配ない」
慌てて腕を持ち上げる彼女に小さく笑って応えた。

建物に集合し、ベリルは今回の作戦遂行に労をねぎらう言葉をかけ解散となる。
「……」
去っていく仲間たちのなか、彼女はまだ呆然としていた。ダグラスの言葉を思い出しただけじゃない。彼の腕に実感したからだ。

彼が不死だという事実に――深々と突き刺さった傷の深さと、流れた血は少なくなかった。
その傷が、たった数分の間に傷口すらも見あたらなくなっていた。視界が定まらないなか、彼のピックアップトラックに向かう。
「ソフィア」
「！」
声に振り返るとダグラスが立っていた。彼はここで別れて別の要請に向かうらしい。
「いきなりキイツこと言ってごめんね」
「あ……ううん」
「君が言ったこと、少し合ってるよ」
柔らかな笑顔を浮かべて見下ろした。
「え？」
青年は家の主人と話しているベリルに目を移して続ける。
「俺にとってはベリルは師匠であり父親なんだ。父親を取られる息子の気持ちって、こうなのかもしれないね」
肩をすくめたダグラスにクスッと笑う。
「……というのはタテマエ」
「え……」
青年は少し意地悪い顔をして、さらに続けた。
「ベリルと付き合える女性なんて滅多にいないと思うよ」
「どういう意味？」
「言ったろ、恋愛感情が無いって。ベリルは誰にでも優しい。逆にいえば特別にはしてくれないってこと」
「！」
もし恋人だと認めてくれたとしても……恋人同士がやるような付き合いは出来ない。
「それに耐えられる人なんて、そうそういないと思うよ」
「……そんなの。解らないわ」
少しふてくされるように視線を外してつぶやいた。

青年はそれにニコリと天使の微笑みを浮かべる。ドキッとした彼女に遠ざかりながらささやくように発した。
『憧れと恋心は似てるケド違うよ』と……

「ソフィア」
「！　はい」
ダーウィンに戻ってきたベリルは、ソフィアをリビングに呼んでソファに促した。
「……」
もしかして、弟子にするかの判断結果かしら……とドキドキして彼のの顔を見つめる。
「お前は傭兵には向いていない」
「！？」
ズバリと言われ自分の反応に戸惑う。ハッキリ言われるとは思っていなかったため、どう反応していいのか解らなくなった。
「ただし」
「！」
「リリパットとしての素質はある」
「！　リリパットの……？」
義賊としての素質があたしにある？　予想していなかった言葉に彼を見つめた。
「ルーシーを覚えているか」
「前にいた人ね」
それに無言で頷く。カイダムを捕まえる時に紹介されたリリパットの女の人だ。
義賊『イーグルキャット』のリーダーだと聞いた。
「彼女が適任だと考えている」
「！　あたしの弟子入り？」
彼は再び無言で頷いた。
「で、でも突然言われても……」

「3ヶ月ほど待って欲しいそうだ」
「！」
「難易度の高い仕事を抱えているそうでね」
「……っ」
不安な瞳を彼に向け、震える手を握りしめた。
「決断しなければならない。普通の生活に戻るのか彼女の下に向かうのか」
「！？」
「3ヶ月の間ここで考えると良い」
立ち上がった彼に驚きの表情を浮かべる。
「……追い出される訳じゃないの？」
彼女の言葉に肩を落として溜息を吐く。
「私がか？　そんな酷い人間に見られていたとは心外だな」
「！　そ、そういう訳じゃ……っ」
「迎えがくる間、お前の自由にするといい」

＊即決です

「……」
ソフィアは部屋でベッドに寝転がり思案した。
「どっちにしたってベリルさんとは離れるってコトよね！」
ガバッ！　と上半身を起き上げる。
「なんかイヤだなぁ……」
３ヶ月の間に恋人として認めてもらう……ううん、絶対ムリ！
「義賊か普通の生活……かぁ」
深い溜息を吐いて再びベッドに横たわる。
「あっ！　待ってよ……？　リリパットならベリルさんとの接点は無くならない訳よね」
ガバッ！　とまた起き上がった。
「ベリルさんから要請とか受けちゃったりして」
にしし……と小気味よく笑いをこぼす。少しでも可能性のある方に進みたかった。
「だって……好きなんだもん……」
納得するまで諦めたくない。瞳を曇らせて宙につぶやいた。

次の朝――
「……」
ベリルは彼女の言葉にしばらく無言になる。
「決断が早いな」
「そういう性格なんで」
ニパッと笑った。
「そういう事ならばここにいる間は私が教えても良いが……」
「えっ！？　ベリルさんが？」
「私も過去に学んだからね」
これは予想外なラッキー！

「はいっ！　よろしくお願いしますっ」
明るく応えて大きくおじぎをした。
「やったぁー！」
部屋に戻り飛び上がって喜んだ。
もう触れあえる機会は無いと思っていた処にラッキーな話が出て飛び上がらずにはいられない。
「でも……リリパットのトレーニングって？」
枕を抱きしめて首をかしげた。

昼過ぎ――
「……い、一緒じゃないのよ～！」
トレーニング用の服に着替えて彼と向き合う。
「同じではないよ」
「どこがですかぁ～？」
彼は構えを解き説明を始める。
「傭兵としてなら打撃技をメインに対処法なりを学ぶが、リリパットならばむしろ素早くどう対処していくかを学ばねばならん」
「それのどこが違うんですか？」
「根本的に仕事の内容が異なる」
言いながら壁際に置かれているソファに向かい、ソフィアもそれに続く。
「傭兵はいかに戦い、生き残り遂行するかが重要だ。しかし義賊には相手を倒す目的はあまり無い」
「……？」
「リリパットはハンターと傭兵に重なる部分が多くあるが、主立った仕事は依頼主の大切なものを取り返す事だ」
戦う事が仕事ではない……彼はそう言って目を細めた。
「！　もしかして、あたしのためにそっちを薦めたんですか？」
ベリルの表情に少しムッとなる。
「女性の兵士は多い。そんな理由で不向きかどうかの判断をする私

ではない」
スッパリと言い放たれた。
「ただ……」
「！」
彼は一度、目を閉じて再び開かれた瞳に愁いを湛える。
「例えどんなに回避しようとしても避けられない危険は存在する」
その危険の多い我々の世界にお前を留めておく事が果たして正しいのか……私には解らない。
「……」
そう語った彼の瞳に涙を流し、その胸に飛込んだ。
「！」
「ありがとう……そう思ってくれるだけで嬉しい」
「……」
引きはがす事もなく彼女の頭を優しくなでる。
暖かな手の温もり――ソフィアは父の笑顔を思い出し静かに涙を流して温もりのなか意識を遠ざけた。
それを確認し抱きかかえ彼女の部屋に向かい、ゆっくりドアを開いてベッドに横たえた。
「おやすみ」
その額にキスをして部屋をあとにする。

次の日から彼は傭兵やハンター、リリパットについて詳しく話して聞かせた。
ハンターって聞くと、アメリカのハンターを思い浮かべたけど違っていた。俗に言うアメリカのハンターは主に保釈金を返さずに逃げた人を探して払わせるって人たちの事を言う。アメリカには、保釈金を貸してくれる会社があるから。
それとはまったく別の職業で、依頼主の希望に応じて人間なり物を捕まえたり手に入れたりする人たちの事らしい。
不死である彼は、事情を知らないハンターたちが相手の口車に乗

せられて捕まえに来る事がある。それを彼女からは苦笑いしか出来なかった。
中には、お金のためだけに捕まえに来る人もいるらしいけど……やっぱり、人それぞれなんだなって思う。いい人も悪い人も、どこにでもいる。
リリパットと対立関係にあるのが盗賊で、『ナイトウォーカー』と呼ばれているらしい。
表の世界と裏の世界……なんだかややこしいけど、その両方を考慮して仕事をする必要があるんだそうだ。
トレーニングはリリパットたちがよく使う道具とか機械とかの操作方法や素早く動くための筋力アップなど、ナイフを使う事を重点的に教わる。
ナイフは銃器とは違ってレンジ（射程範囲）は自分の腕の長さしかないけど、用途は多い。
投げる事で遠いターゲットにも当てられるし、威力とかは弱いけど銃器類に比べたら使える場所や使い方が多種多様で自分に合った形を見つけるといいと教えられた。
「このマークはなんですか？」
「！」
ナイフに刻印されているマークを指さした。
切っ先を上に向けた剣の柄に1対の翼、その後ろには盾を簡略化しただろうと思われる図が描かれている。
「私のエンブレムだよ」
苦笑いを浮かべて続ける。
「一人前になるとエンブレムを造る者も多い」
「へえ……」
改めてエンブレムを見つめた。

「あの、ベリルさん」
「ん？」

トレーニングを終えシャワーから上がったソフィアは言いにくそうに口を開いた。
「もしかして……食べなくてもいいんじゃないですか？」
それに少し驚いたベリルだが、小さく笑って視線を外す。
「じゃあ、どうして食べてるんですか？」
「1人より2人だよ」
「！？」
静かに発した彼の言葉に声を詰まらせた。
「ベリルさん……」
あたしのために食べてくれてたの？　確かに、ベリルさんが食べなくてもいいって解ってても1人で食べると寂しかったと思う。
どうして、そんなに優しいの？　だから誤解しちゃうじゃない、もっと好きになっちゃうじゃない……
「ベリルさんは……恋人作らないんですか？」
「！　……私には恋愛感情は無い。元より欠落している」
「それでも、好きだって言ってくる人がいたら？」
「死なない相手を好きになるのは不幸だよ」
柔らかだが、寂しげな瞳がソフィアを見つめる。
「それでも……っ！」
詰まらせた声を振り絞って続けた。
彼は目を細め、彼女から視線を外して宙を見つめる。
「同じ時間を生きられない事に耐えられる者はいない」
「！」
共有出来ない時間……共に年を取る事も叶わず、自分だけが年を取っていく。
ソフィアはその事に想像がついていかなかった。無理もない、彼女はまだ18歳だ。
「……」
正面からぶつけられる感情に彼は沈黙した。
そして――

「私には何も応えられない」
「！？」
目を見開いた彼女を一瞥し、無言でキッチンに足を向けた。

＊不屈の精神

「わ～バカバカバカ！」
部屋に戻ったソフィアはベッドに寝転がり自己嫌悪に泣きたくなった。あのあと、なんとなく気まずくて晩ご飯はほとんど彼に目を合わせられずにいた。
おかげで会話もろくすっぽ出来ず、そそくさと部屋に戻ったのだ。
「なんであんなコト言ったのよあたし！」
ちゃんとした告白はしなかったものの、あれじゃあ告白したのと同じじゃない。
「……」
上半身を起き上げてベッドの上でしゃがみ込む。
彼女の脳裏にダグラスの言葉がこだまのように響いていた。
『ベリルの苦しむ姿を見たくないんだ』
愁いを帯びたエメラルドの瞳……相手の気持ちに応えられない苦しみが映っていた。
「……っ」
キュッ……と胸が締め付けられると同時に、その姿に溜息が漏れる。
「はぁ～、すっごく綺麗だったな……」
ただでは起きない彼女である。

＊2人きりの……？

次の朝――起きると彼は変わらず朝食を作っていた。ソフィアは内心、ほっとする。
「おはよう」
「あっ、おはよう」
複雑な笑顔で返すと彼は小さく笑った。
「……」
ただの会話だと思われたのかしら……何も変わらない彼に少し眉をひそめた。
良かったような悪かったような。と首をかしげながらリビングのソファに腰掛けてテレビを付けた。
「！」
そんな彼女の前に置かれるオレンジジュースと数十枚のＡ４の紙。
「……これは？」
「武器の一覧。とりあえずハンドガンを一通りザッとでいい、覚えるように」
言われて、持っていたコップを落としそうになった。
「こんなに……？」

朝食を終えて、部屋に戻りリストを眺める。画像付きで解説されているが、どれもそんなに違いは無いように見える。
「リボルバーとオートマチックの違いは解るよ。うん、見た目が全然、違うもの」
真ん中にレンコンみたいな丸いものがついてるのがリボルバー、父さんも護身用に持ってた。
「……」
ハンドガンによってカートリッジも違ったりするんだぁ～。などと見比べながらゴロンと仰向けになる。

「頭痛くなってきた……」
気分直しに雑誌を開こうとベッドの横にあるデスクに手を伸ばした。
「あれ……？」
デスクの上に置いてあった雑誌が無い。
「変ね……あ」
よく見ると、雑誌は棚にきちんと収められていた。
「あたし直したっけ？」
記憶に無い。
「ハッ！？　もしかしてっ」
慌てて部屋を飛び出し階段を駆け下りる。
「ベリル！」
「ん？」
「あたしの部屋に入った！？」
昼食の準備をしている彼に声を張り上げて問いかけた。
「？　掃除をするためには入らねば」
「！？」
掃除！？　そういえばずっと部屋が綺麗だったわ！　あたし掃除してないのに！
「これからはあたしが掃除するから！」
「別に構わんが……」
「あたしの許可無く入っちゃだめ！」
「？　そう言うなら」
なんで今まで気がつかなかったのあたし……頭を抱えて部屋に戻る。そして、うなだれるようにベッドに転がった。
彼女はある程度、自由にさせてもらっていた。雑誌も自分で購入したもので、彼が『研修生』という名目で彼女に給与というお小遣いを与えている。
「……あたし、ベリルさんの子どもみたいになってるわね」
ここでようやく自分がただの居候になっている事に気がついた。

「あたし、魅力ないのかなぁ」
まだ１８歳だけど、この気持ちは本気だもん……天井を見上げて瞳を潤ませる。
「６１歳……年の差４３……」
親と子とかいう年の差じゃないわよねすでに……考えて生ぬるい笑みが浮かぶ。
「見た目は２５歳なんだから年の差は７つよ！」
ガバッ！　と起き上がり、なんとなく言い訳じみた言葉を発した。
「てかヤバイ。炊事に洗濯に掃除してもらってるじゃない」
なんか一つくらいやらなきゃタダ飯食いだわ。と、なんとなく落ち込む。
「ああん！　どっか一つくらいダメなとこ無いの！？」
全部出来ちゃうなんて反則よ！　――瞬間、ハッと思い出す。
「出来ないとこ……恋愛？」
そんなのって無いよね。頭（こうべ）を垂れて自分の手を見つめた。
「こんなんじゃダメダメ！　早く覚えて褒めてもらお」
首を振って再びリストに目を通す。

「ソフィア」
「！　何？」
夕食が終りリビングでくつろいでいると突然、呼ばれた。彼はグラスを２つ持って右斜めのソファに腰を落とし、話を続ける。
「オーストラリアは初めてか」
「え？　うん」
聞いた彼はブランデーの入れられたグラスを傾け、その言葉に少し考える。
「？」
首をかしげて見つめていると、彼がおもむろに口を開く。
「旅行でもするか」
「えっ！？」

いきなりの提案に目を丸くした。
「研修旅行という形ではあるが、ついでに観光するのも良いだろう」
「旅行……」
ベリルさんと……？　呆然とした。
「明後日に出発だ」
「はやっ！？」
「早いか？」
「いや決断が！」

＊研修旅行は危険な香り

「やったぁー！　旅行だ旅行！」
自分の部屋に戻ると、声を上げてベッドに飛び乗った。
そうよ！　告白するチャンスじゃない！　ロマンティックな雰囲気に持ち込んで……
「うくく……」
ソフィアはニヤニヤしながらベッドに潜り込み意識を遠ざけた。

朝――なかなか寝付けなかったが、いつもよりも早く目が覚めてしまった。眠い目をこすり、ここに来る時に使った旅行バッグを引っ張り出してクローゼットの中を眺める。
「どこに行くのかな～何日くらいなんだろう？」
ウキウキしながら服を詰めていく。色んな想像や妄想が止まらない。
「ん？　待てよ……？」
研修旅行？　どういう意味なんだろ？　研修って何するのかな？
彼女の頭の中は疑問符で一杯だ。
「……まあいいや。聞けば解るし」
鼻歌交じりに着替えを済ませ、軽快に階段を下りていった。

「ふえっ！？　車で！？」
ソフィアは危うくスクランブルエッグを吹き出しそうになった。
「研修旅行と言ったろう。サバイバル術を学ぶうえではフィールドに出なければな」
「……リリパットに必要なんですかぁ？」
コンソメスープをすすりながら質問する。
「全て学べという訳ではないよ。かじる程度の勉強だ。知っているのと知らないとでは雲泥の差がある」

「旅行って……どんなルート？」
問いかけに、ダイニングテーブルにサラダを乗せて乗せて応える。
「ここからまずバリングラ。次にウルル、そしてシドニーで観光」
「……」
マウント・オーガスタスにエアーズ・ロックで最後はシドニーか。観光といえば観光ね。世界一と二位の一枚岩に、確かシドニーには世界遺産のオペラハウスがあった。
「！」
ハッ！？　ちょっと待って……
「あの……寝る処は？」
確かオーストラリアって人が住んでる範囲は少ないって……自然国立公園にホテルなんか無いわよね。
「車の中で寝る」
「えええぇぇ！？」
うそっ！？　本気？
「ひ、飛行機で行きましょうよ」
「それでは意味が無い」
いや、あたしには旅行ってだけで充分に意味があるんですけど……そうも言えず、彼女の意見はさっぱりと拒否されるのだった。

「車ってあれよね……来る時に乗ったやつ」
部屋に戻って唸りながらウロウロと歩き回る。
まだハマーとかなら格好いいけど、ちょっと薄汚れたオレンジレッドのピックアップトラックなんだもんな……あれはあれで悪くはないけどさ。
ていうか、狭い車の中で2人きり！？　嬉しいんだか怖いんだか解らない……！
「……狼になったりして」
自分で言ってて恥ずかしくなった。

あっという間に旅行当日――食料や水を積み込んで車は発進する。色々と考えていたのに、思っていたより時間は速かったらしい。
「……」
ソフィアは、荷台に積まれた荷物に助手席から視線を投げる。なんか、凄い武器が乗せてあったような……そんな彼女の思考を意に介さず、彼は楽しげにハンドルを握っていた。
数時間後、暇そうにしている彼女を一瞥し口を開く。
「私の愛用しているハンドガンについて説明しろ」
「うえっ！？」
突然、訊かれてわたわたと両手をバタつかせた。
「え……えと～ＳＩＧ（シグ）／ザウアーＰ２２６だっけ……９ミリ・パラベラム弾を使用するもので……装弾数は～……」
ちらりと視線を向ける。彼は返事を待つように前を向いて運転していた。
「装弾数はぁ～……１５発と１発！」
「上出来だ」
「良かったぁ……」
「ではグロック１７について」
「ひいぃ～……」
ソフィアの叫び声が車の中に響いた。

「……ホントに荒野だ」
窓から見える景色につぶやいた。
街は海岸沿いにあり大陸の中程はほとんどが荒野だ。荒野といっても草木が点在している。
街から街につながる道路はいくつも張り巡らされてはいるが、活気があるという訳ではない。
「……」
こんな処に１人にされたら、絶対に生きて行けない。小さく身震いしてブランケットを膝にかけた。

もうすぐ夏になるオーストラリアだが、夜は少し冷える。
「！」
ソフィアが再び外に目を移すと、暗闇が広がっていた。
民家の無い砂漠……灯りが無いのは当り前だが初めての暗闇に少し身を震わせる。
「今日はここまでにしよう」
「！？」
車を止めて外に出る彼につられるように慌ててドアを開いた。
荷台から折りたたみのイスと食材を入れてあるクーラーを降ろし、たき火の準備を始める。

しばらくして、肉の焼ける良い匂いが漂う。パンと薄切りの牛肉にアスパラガスがアルミの皿に乗せられソフィアに渡された。
「……」
なんか質素……それでもまだ生肉がある今は贅沢なんだ。数日後には干し肉になるってベリルさんが言ってたもの。
ソフィアは薄切り肉をフォークに刺して口に運ぶ。
「！　美味しい！」
「それは良かった」
ブランデーを傾けてニコリと微笑む。貴重な食料を減らさないために、今回ばかりは食べないらしい。余分には持ってきているけど、もしものために取っておくんだとか。

＊夜の吐息

確かに、あたしは食べ物が無いと死んじゃうもんね……車があるから死ぬような距離じゃないけど。

目の前のステーキを見下ろして、これはとても贅沢な夕食なのかもしれないとじっくり味わう。

ベリルはそれを見ながら、氷の入っていないグラスを傾けて星空を仰ぐ。心地よい虫の音が流れていく時間をゆっくりと感じさせた。

「！」

遠くから犬のような遠吠えが聞こえてその声にビクリと体を強ばらせた。

「ディンゴだ」

「！　野犬？」

オーストラリアには野生の犬がいる。彼らを駆逐せず人の生活する場所とはフェンスで区切っているらしい。

それでも時々、そのフェンスから出てきて家畜を襲う。その管理をしているのは国の人間だ。

フェンスの横をひたすら車で走ってチェックしていく。

「フェンスからは遠い、どこかから逃げ出したディンゴだろう」

「！　大丈夫なんですか？」

「ん、心配ないよ」

安心させるように微笑んだ。炎で2人の姿はオレンジに照らされる。

その中にあってもなお、彼のエメラルドの瞳は輝きを失う事なくソフィアを魅了した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2628x/

あなたを愛したいくつかの理由

2011年10月28日15時10分発行